

島根県立大学 総合政策学会  
『総合政策論叢』第30号抜刷  
(2015年11月発行)

# インターンシップの意義と 「社会人基礎力」

松尾哲也

# インターンシップの意義と「社会人基礎力」

松尾哲也

1. はじめに
2. インターンシップと「社会人基礎力」
3. 大学における「社会人基礎力」の習得
4. 総括

## 1. はじめに

近年、日本の各地域で、インターンシップが就業力育成のための事業として積極的に推進されている。その推進のための協議会は、産業界の協力のもと、全国各地に設立され、インターンシップを斡旋・推進するNPO法人も大学・産業界と連携して重要な役割を果たしている。

我が国において、インターンシップは、政府の人材育成策として推進された経緯がある。1997年5月に「経済構造の変革と創造のための行動計画」が閣議決定され、そのなかにインターンシップの推進が盛り込まれることになった。そして、当時の文部省（現文部科学省）、労働省（現厚生労働省）、通産省（現経済産業省）が研究会を通じて議論を重ねた結果、三つの省の合意文書「インターンシップ推進にあたっての基本的考え方」（以下、三省合意）が1997年9月に発表された。その三省合意のなかで、インターンシップは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義された。

さらに、2003年6月、政府は、「社会的引きこもり」やフリーター、ニートといった若者の問題、特に雇用の問題に対処するため、「若者自立・挑戦プラン」を打ち出した。そのなかで小学校からのキャリア教育の推進が盛り込まれて以来、職場見学、職場体験という名称で、小学校や中学校で職場体験型のインターンシップが実施されている<sup>1)</sup>。

文部科学省が発表した報告書「大学等における平成23年度のインターンシップ実施状況について」によると、「単位認定を行う授業科目として実施されているインターンシップの実施学校数」は、大学526校、短期大学162校となっている。調査対象となった全国の国公私立大学（748校）のうち70.3パーセントの大学、そして調査対象となった全国の短期大学（349校）のうち46.4%の短期大学が、単位認定科目としてインターンシップを実施している。「単位認定を行う授業科目として実施されているインターンシップ」のうち、特定の資格取得に関係しないものに参加した学生、すなわち教育実習や看護実習、臨床実習など特定の資格取得のために現場で実施する実習ではなく、企業等の就業体験としてインターンシップに参加した学生は、大学で56,519人であり、短期大学では、4,652人であった<sup>2)</sup>。

以上のようにインターンシップは、全国の大学において積極的に推進されているが、課題も浮き彫りになっている。体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターン

シップの更なる充実に関する調査研究協力者会議が2013年8月9日付けで発表した「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策についての意見のとりまとめ」によると、インターンシップ参加を希望する学生の数に比べて受入企業数が不足していること、また学生のインターンシップ希望先が大企業や有名企業に集中し、中小企業を希望する学生が比較的少ない傾向にあること、また企業に受け入れられやすいプログラム等を構築する専門的知見を有する人材が不足していること、そして大学等によるインターンシップへの関与が不十分であることなどの課題がある。

また2015年度から就職活動が後ろ倒しになったことに伴い、インターンシップが企業説明会の代替手段として実施されるケースも現れている<sup>3)</sup>。

このようにインターンシップが積極的に推進され、またそれが多様化するなかで、インターンシップに関する根本的な問いが忘却されてしまう危険性はないのだろうか。

インターンシップは、採用や就職活動と密接に関連させるべきなのか、それとも採用や就職活動とは一定の距離を置いて、教育プログラムとして実施されるべきものであるのか、そうした根本的な議論は、インターンシップを盛んに推進しようとする機運のなかで置き去りにされているように感じられる。

「インターンシップとは一体どのような意義を持つのか」、その問いに対する回答は千差万別であるが、大学・産業界・官公庁・NPO法人は、それぞれの目的意識を持ちつつも、共通の土壌のもとに、「学生のためのインターンシップ」を積極的に推進していくことが求められる。その共通の土壌は、インターンシップの意義をめぐって展開される建設的な議論の上に醸成されていくものであろう。

本稿は、そうした問題意識のもとに、就職や採用を前提とした就業体験に留まらないインターンシップの意義を、「社会人基礎力」を用いて解明し、インターンシップ教育のさらなる発展に寄与することを目的としている。

「社会人基礎力」とは、経済産業省の「社会人基礎力に関する研究会」が示した概念であり、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として定義されている。経済産業省は、「社会人基礎力」を「個人が社会の中で豊かで充実した人生を送っていくための必要な能力」として、「前に踏み出す力」（一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力）、「考え抜く力」（疑問を持ち、考え抜く力）、「チームで働く力」（多様な人とともに、目標に向けて協力する力）に分け、さらにその3つの能力を12の能力要素に分けている<sup>4)</sup>。

○社会人基礎力

前に踏み出す力（一步前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力）
・「主体性」：「物事に進んで取り組む力」 ・「働きかけ力」：「他人に働きかけ巻き込む力」 ・「実行力」：「目的を設定し確実に行動する力」
考え抜く力（疑問を持ち、考え抜く力）
・「課題発見力」：「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」 ・「計画力」：「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」 ・「創造力」：「新しい価値を生み出す力」
チームで働く力（多様な人とともに、目標に向けて協力する力）
・「発信力」：「自分の意見をわかりやすく伝える力」 ・「傾聴力」：「相手の意見を丁寧に聴く力」 ・「柔軟性」：「意見の違いや立場の違いを理解する力」 ・「状況把握力」：「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」 ・「規律性」：「社会のルールや人との約束を守る力」 ・「ストレスコントロール力」：「ストレスの発生源に対応する力」

出所：経済産業省のHP（<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>）に基づき、筆者が作成した。

これまでインターンシップを「社会人基礎力」の観点から分析した研究としては、真鍋（2010）の研究<sup>5)</sup>が、インターンシップによる「社会人基礎力」の伸長と、それが就職活動に与えた影響について分析している。

さらに、文系大学におけるPBL型教育<sup>6)</sup>が、エンプロイアビリティ<sup>7)</sup>や「社会人基礎力」に与える効果を検証したものとして、太田（2010）の研究<sup>8)</sup>がある。その研究では、PBL型のインターンシップが、「社会人基礎力」やエンプロイアビリティの醸成に効果があることを明らかにしている。

また、森・堀内（2011）の研究<sup>9)</sup>では、高等学校のインターンシップが「社会人基礎力」のなかでも、「チームで働く力」の育成に貢献したことを明らかにしている。

山野・平井・成行ほか（2014）の研究<sup>10)</sup>では、インターンシップの効果として、企業・仕事に対する理解の深化、専門領域についての実務能力の向上、職業生活に対する適応力の向上、社会で必要とされていることへの気づきの獲得、さらには、大学で何を学ぶべきかといった将来のビジョンが明確になることを指摘している。さらに、その研究は、「社会人基礎力」の講義も含む事前学習の重要性を指摘し、インターンシップの効果を単に実務能力の向上や職業生活に対する適応力の向上だけに限定せず、大学における学習意欲の向上や責任感、協調性、自立性等を養い、人間的な成長に求めていることでも注目に値する。またインターンシップ以外のフィールドワークやボランティア、講義、演習における「社会人基礎力」の育成の可能性・効果についても数多く事例が紹介されている<sup>11)</sup>。

これまでインターンシップと「社会人基礎力」の研究では、インターンシップが学生の「社会人基礎力」の伸長に対してどのような効果を持つのか、という点に主眼が置かれてきた。またインターンシップの効果を学習意欲の向上や責任感、協調性、自立性等の涵養

に求めつつも、「社会人基礎力」を含めた多様な能力をインターンシップ後の学生生活のなかで、いかに向上させていくのか、そのプロセスやビジョンが必ずしも明確ではないという課題があった。

本稿は、これまで十分に解明されてこなかった3つの課題に取り組み、「社会人基礎力」を用いて、改めてインターンシップの意義を明らかにし、その教育効果を向上させる視点を提供したい。

まず課題となるのは、「社会人基礎力」の具体的な内容を学生に向けていかに伝達するか、という課題である。実際にその能力要素が、どのような場面において、どのような行動として現れるのか、その内実をいかに学生に伝達するか、という課題がある。

インターンシップの内容は千差万別であるが、社会人の働く姿を観察できることは共通している。本稿では、学生がその観察により、多様な気づき・学びを得ていることを明らかにする。つまり「観察による社会人基礎力の具体化」の教育的効果である。それを事前・事後教育に活用することによって、インターンシップの学びを深化させることができる。

次に「社会人基礎力をどのように向上させるのか」、「社会人基礎力の向上のプロセス・ビジョンをいかに描くのか」という課題がある。インターンシップの教育効果を向上させるために、学生は、どのような場面・プロセスにおいて、自己の「社会人基礎力」を向上させていくべきなのか、そのプロセス・ビジョンを提供することが求められる。

もう一つの課題は、二つ目の課題と関連するが、インターンシップの学びをその場限りのものにするのではなく、いかにその後の生活につなげていくのか、という課題である。この課題については、真鍋（2010）の研究が、インターンシップ後の就職活動に及ぼす影響を視野に入れて分析しているが、ここでは、特にインターンシップの学びを大学生活全般に活用することを念頭において議論を展開したい。

インターンシップは、就職活動を目前に控えた3年生だけを対象に実施されるものではなく、1年生・2年生を対象にも実施されている。そして1年生・2年生においても、参加を希望する学生の数は増えつつある。

就職活動までまだ比較的時間がある1年生・2年生のインターンシップについては、就職という枠を超えたインターンシップの位置づけが必要であり、大学生活の前半におけるプログラムとしてその意義を明らかにし、また1年生・2年生がインターンシップの学びをその後の生活に活用する展望を描くためには、参加後の学生生活への活用の仕方を示す必要がある。

なお今回の研究を進めるにあって、学生を対象としたアンケート調査を実施した。調査の対象とした学生は、愛知淑徳大学の学生と鳥根県立大学の学生である。以下の項目のなかで、図1～3のアンケート結果の分析および学生のコメントは、2014年2月～3月にかけてインターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生へのアンケート調査に基づいている。図4のアンケート結果の分析および学生のコメントは、2014年度に「キャリア形成Ⅰ」と「キャリア形成Ⅱ」の授業を履修した鳥根県立大学の学生へのアンケート調査に基づいている。

## 2. インターンシップと「社会人基礎力」

### (1) 向上した「社会人基礎力」

2014年2月～3月にかけてインターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生のうち、83名を対象に、インターンシップを経験して、「社会人基礎力」のなかで、最も向上したと思うもの、2番目に向上したと思うもの、3番目に向上したと思うものについて尋ねた。

その結果、最も向上したと思うものとして、最も高い数値を示したのは「主体性」であり、2番目に高い数値を示したのは「課題発見力」、3番目に高い数値を示したのは、同数で「実行力」と「傾聴力」であった。

最も向上したと思うもの、2番目に向上したと思うもの、3番目に向上したと思うものを合計した数値で、最も高い数値を示したのは「主体性」、2番目に「課題発見力」、3番目に「規律性」であった。

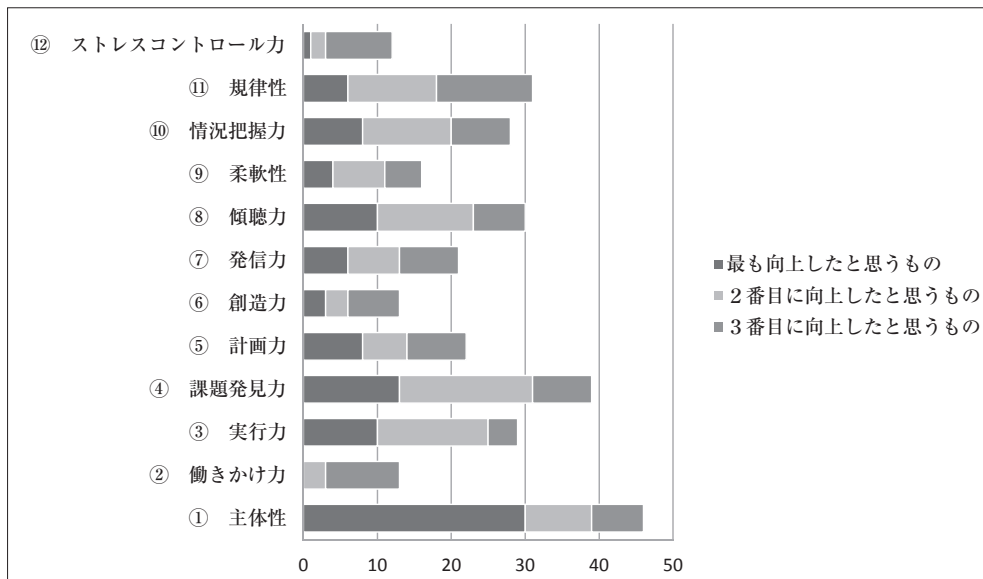


図1 インターンシップ後に向上したと思う「社会人基礎力」(n=83)

出所：2014年2月～3月にかけてインターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生へのアンケート調査をもとに筆者が作成した。

### (2) 身に付けたい「社会人基礎力」

さらにアンケートでは、インターンシップに参加した後、「最も身に付けたいと思った社会人基礎力」を一つとその「社会人基礎力」を選択した理由について尋ねた。その結果、「発信力」が最も高い数値を示し、次いで「主体性」、3番目に「実行力」が高い数値を示した。

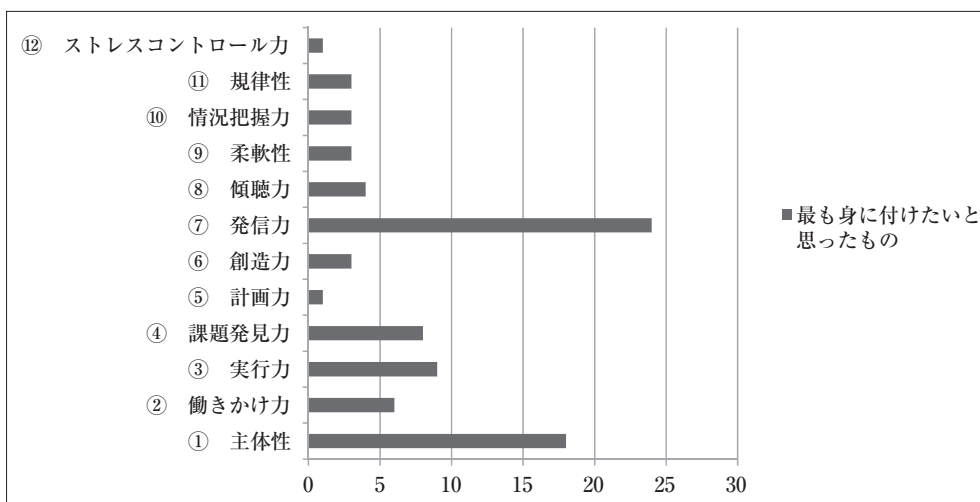


図2 インターンシップ後に最も身に付けたいと思った「社会人基礎力」(n=83)  
出所：2014年2月～3月にかけてインターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生へのアンケート調査をもとに筆者が作成した。

「発信力」を選んだ学生の理由としては、「理解して自分自身の言葉で伝えることが難しいことを改めて実感したので、もっと色々なものを見て伝え方を学びたい」、「インターンシップを通して伝え方をどのようにすると伝わりやすくなるのか工夫しながら行う事ができましたが、さらに伝える力を身に付けたいと思いました」、「自分の意図が伝わらないことが多かったので、わかりやすく、簡潔に伝える力をつけたい」等の理由があった。

上記のアンケート記述から、「発信力」を選んだ学生は、インターンシップ先の社会人とのコミュニケーションを通じて、自分の意見や考えをわかりやすく伝えることの難しさと同時にその大切さを実感していることがわかる。そして、さらに分かりやすく簡潔に伝える力を身に付けたいという願望を持っている。

また、「インターンシップ先の社員の方の説明がとても分かりやすく、自分も言いたいことを分かりやすく伝える力が欲しいと思った」という理由もあり、インターンシップ先の社会人の「発信力」に触れて、それが目指す「発信力」のモデルになっている。

「主体性」を選んだ学生の理由としては、「自分から行動しなければ、何も始まらないので主体的に行動する大切さを学びました」、「自分から動くことで、自分の視野が広がるのが今回分かった」、「自ら積極的に行動しなければ、無駄な時間を過ごすことになる実感したから」、「何をすることも受け身では自分自身が成長できず他の人からの信頼を得ることができないため」、「主体性があると、自分は何を目標にしているかわかり、周りの人にも理解を求めやすくなると思う」といった理由があった。

学生のコメントから、なぜ「主体性」が大切なのか、その理由を把握していることが分かる。例えば、「主体性」を持つことが、視野の拡大、時間を無駄なく有効に使うこと、自己の成長、信頼の獲得、目標の明確化や周囲からの目標の理解獲得につながるなど、「主体性」を持つことの効果を把握し、その必要性を実感している。

次に「実行力」を選んだ学生の理由としては、「目的は誰でも設定できるが、実行するとなるとうまくいかないこともあることを学んだから」、「何事も中途半端で終わらせず、

目的を設定し確実にすることで毎日を充実して過ごせると思うから」、「考えているだけでは上手くいくこともなく確実に行動するからこそ上手くいったり失敗したり前へ進めるから」といった理由があった。

インターンシップに参加した学生は、ただ考えるだけで前に進まなければ、成功も失敗もないことを学んでいる。また毎日を充実させるために、「実行力」が必要であることを実感している。まさに「実行力」は「前に踏み出す力」の重要な要素であることを学んでいる。

### (3) インターンシップ先の社会人の「社会人基礎力」

インターンシップを通じて、学生自身は、実際に仕事を体験することによって多様な学びを得る。ただ見過ごしてならないのは、学生は、インターンシップ先の社会人の働き方を観察することによって、大きな学びを得ていることである。

今回、学生が社会人の働き方を観察することによって得た学びを分析するために、インターンシップ先の社会人が最も身に付けていると思った「社会人基礎力」を一つ選択してもらい、またそれを選択した理由についても尋ねた。

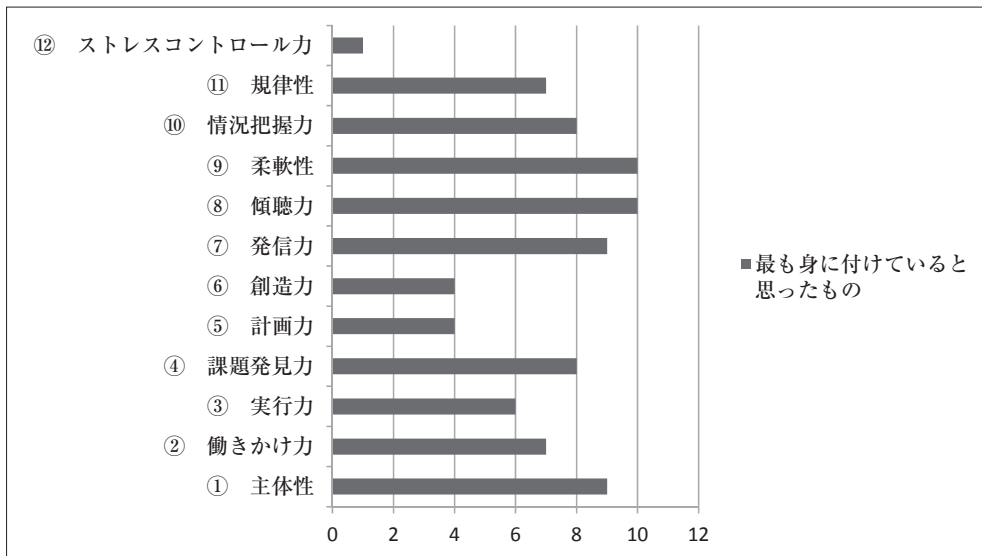


図3 インターンシップ先の社会人が最も身に付けていると思った「社会人基礎力」(n=83)

出所：2014年2月～3月にかけてインターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生へのアンケート調査をもとに筆者が作成した。

インターンシップ先の社会人が最も身に付けていると思った「社会人基礎力」として、最も回答が多かったのは、同数で「柔軟性」と「傾聴力」であった。3番目に回答が多かったのは、同数で「主体性」と「発信力」である。

「柔軟性」を選択した理由としては、「利用者一人一人の違いを知り、それぞれの人に合った指導をしていた」、「営業職で最も重要なことは相手のことを考えるということであると思った。相手の機嫌や、その時忙しいかどうかなどを考えてからの行動が素晴らしいと思ったため」など、利用者や顧客の立場に立って臨機応変に対応している社会人の姿に



着目している。

また「多くの従業員の方が、意見を出し合い、課題解決をしようとしている場面をよく見たから」というコメントもあり、問題解決のために、従業員同士で意見を出し合っている姿にも注目している。

さらに、「最後にインターンシップ内容について学生の意見を聞いて今後に活かそうとしていた」、「インターンシップ生という私たちの立場で理解し、丁寧に接してくれたから」というコメントもあり、社会人のインターンシップ研修生に対する態度からも「柔軟性」を看取していることが分かる。

「傾聴力」を選択した理由としては、「人に合わせた目線でお話をされていた。お客様からの『ありがとう』が聞こえた」、「人と関わる仕事だったので、一人一人のニーズ、状態を把握したうえで声かけ、対応をしていると感じたから」、「お客様が言ったことを正確に理解していると思ったから」などがあり、「傾聴力」については、顧客から情報や要望を理解・把握したうえで、仕事を進めている社会人の姿に着目している。

「主体性」を選択した理由としては、「自分の行動に責任を持ちながらも、物事をすばやくやり遂げる力があると感じた」、「内容が決まっているわけではないので全てが主体性を持って行動しないといけない。目的を持って取組んでいる人ばかりでした」、「誰もが自分の仕事を率先して取りに行っている姿が印象的だったから」、「従業員の方々はみんな自分の周りの状況をよく見て、今何をすることが大事なのかをしっかりと把握している」などのコメントがあり、周囲の状況を見ながら、素早く率先して物事に取り組む社会人の姿に着目している。

「発信力」を選択した理由としては、「相手に伝えるという難しいことを多くの人が身に付け、当たり前のように行っていた」、「説明方法が非常にわかりやすく、端的に説明していた」、「指導業務として、意見をわかりやすく伝えていたと思ったから」、「プレゼンテーション能力がとても高いと思った」、「営業同行、打ち合わせについていく中で場所にに応じて準備をし、アピールしたいポイントをわかりやすく伝えていたから」、「営業同行が多く、人と接する機会が多かったため」といったコメントがあった。

学生は、インターンシップ先の社会人の説明のわかりやすさ・プレゼンテーション能力の高さから刺激を受けている。また営業に同行した際のインターンシップ先の社会人の対人コミュニケーションを観察して、アピールポイントなどをわかりやすく伝えていることにも着目している。

### 3. 大学における「社会人基礎力」の習得

#### (1) 身に付けたい「社会人基礎力」

鳥根県立大学では、1年生必修のキャリア系科目「キャリア形成Ⅰ」と3年生必修のキャリア系科目「キャリア形成Ⅱ」を開講している。その二つの科目では、「社会人基礎力」の授業を取り入れ、その内容・意義を学生に伝えている。

今回、2014年度にその二つの授業を受講した学生のうち368名に対して、「社会人基礎力」のなかで、最も身に付けたいと思うもの、2番目に身に付けたいと思うもの、3番目に身に付けたいと思うものについて尋ねた。

また「最も身に付けたいと思った社会人基礎力」について、その能力を選択した理由と

「最も身に付けたいと思った社会人基礎力」をどのような場面・活動で、どのように身に付けたいと思うのか、自由記述方式で尋ねた。

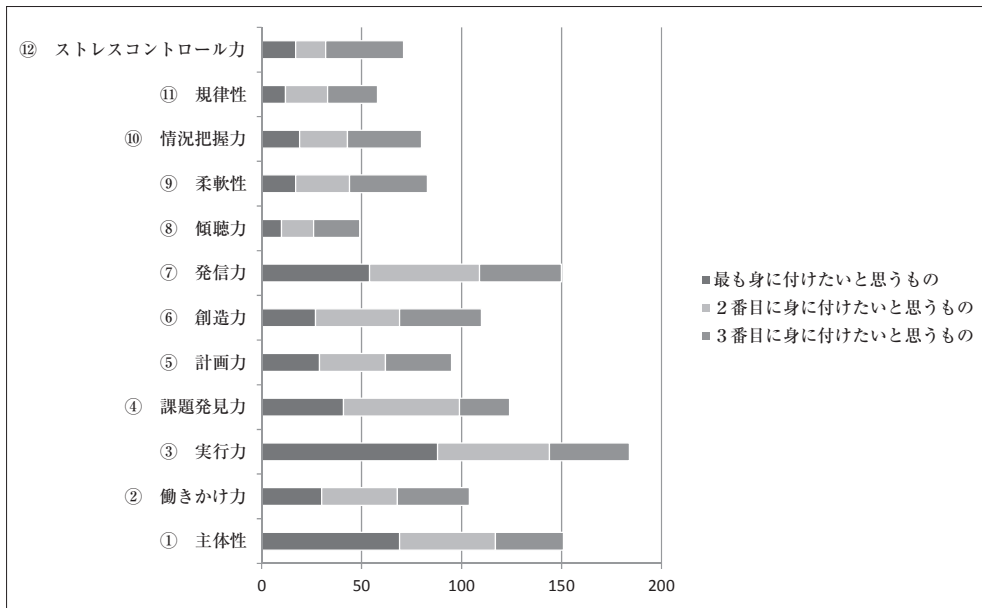


図4 身に付けたい「社会人基礎力」(キャリア系科目受講者) (n=368)

出所：2014年度に島根県立大学の「キャリア形成Ⅰ」と「キャリア形成Ⅱ」の授業を履修した学生へのアンケート調査に基づき、筆者が作成した。

「最も身に付けたいと思うもの」の数値、および「最も身に付けたいと思うもの」から、「2番目」、「3番目」に身に付けたいものまでの合計値の双方で、最も高い数値を示したのは「実行力」であり、2番目に多かったのが「主体性」、3番目に多かったのが「発信力」であった。

「最も身に付けたいと思った社会人基礎力」を選択した理由として、まず「実行力」については、大きく分けて二つの理由が見られた。以下、学生のコメントに即して、その理由を示す。

まず一つは「自分に不足している能力である」という理由である。例として、「目標を設定しても実行できないことの方が多いから」、「今の自分に一番足りていないものだと思ったから」などの理由があった。

もう一つの大きな理由は、「必須の能力であるから」、もしくは「重要な能力であるから」という、能力の必要性・重要性に関するものである。

理由の具体例として、「自分の頭の中で考えているだけで行動に移さなければ何も変わらないと思うから」、「目標設定までのプロセスにも意味があり行動することで更に成長できるから」、「考えるだけでなく目的を決め実際に行動しなければ意味がないと思ったから」、「結果が重視される社会で、確実に行動する力は必要だと思ったから」、「自分の目的に向けて、確実に進んで行ける精神と計画性は、自己実現または他人をひきつけ、協力してもらおう際にも最も重要な力だと思ったから」、「社会人になって大切なのは自分から積極的になって確実に行動できる力だと思うから」などの理由があった。

次に「主体性」について、学生は、社会人になった後に必要になることを視野に入れて、「主体性」を求められる能力として理解している。具体的には、「周りに流されて行動に移すことが多いので、社会人になるにあたって、自分から進んで行動できる人材になることが目標だから」、「計画性を持って業務を行う事は社会人として、職務を全うする点で必要だと思うので」、「物事にすすんで取り組む力は社会人として働くうえでもっとも重要であると考えのため」、「社会に出て必要とされる最低限の能力だと思うので」、「仕事に対して、自分から動いて行動していけるようになりたいから」、「主体性は、どのようなことをしていくうえでも重要な力だと思うからです。サークル、地域活動、会社、どのような共同体の中でも自分から動かなければ物事は見えてきません。そのため主体性は重要であると思います」などの理由である。

次に「発信力」については、自分の意見をわかりやすく伝えることを難しいものとして捉え、苦手もしくは欠点とする理由が目立った。「伝えたいことがあってもそれを分かりやすく説明することが難しいから」、「まず自分の意見を伝えることが出来なければ、仕事もはかどらず、周りの評価も上がらないと考えるから」、「プレゼンの場や会議などを行う時に、自分の考えを正しく人に伝えることは、とても重要だと思うから」、「大学生生活を過ごして自分には足りないと思うことがあったから」などの理由である。学生は、わかりやすく自分の意見を伝えることの重要性を自覚すると同時に、わかりやすく自分の意見を伝えることに苦慮していることがわかる。

「社会人基礎力」を学ぶ意義の一つは、自己の欠如した能力を「社会人基礎力」の概念によって明確化し、自己を見つめなおし、欠如した能力を身に付ける起点をつくることでもある。では、学生は、「社会人基礎力」をどのような場面・活動で身に付けようとしているのだろうか。

## （2）「社会人基礎力」と学生生活

上述した二つのキャリア系科目を履修している学生を対象にしたアンケートでは、「最も身に付けたいと思った社会人基礎力」をどのような場面・活動で、どのように身に付けたいと思うか、についても尋ねた。以下、学生のコメントについて紹介する。

「実行力」を身に付けることについては、「ゼミや、ボランティアでの企画などの場面で積極的に行動していき身に付けていきたい」、「TOEICなどで目標スコアを設定し、それに到達できるよう日頃から英語を学習することで身に付けたい」、「日常生活を送っていくうえで、こまめな目標を立てて実行していく」、「自分がやりたいと思ったことを素直に実行する」、「部活・アルバイトなどで自分が中心になって主体的に何かに取り組む」、「どんな小さなことでも良いから目標を立てそれをクリアする」、「今自分が行っている勉強や部活を例にとるとテストや試合での目標を定め、達成することで身に付けていきたいと思う」、「自分が行動しないと何も発展しないような物事に積極的に取り組む」、「この学生生活の中で勉強面、サークル面、生活面で目的を設定することを心掛けたい」などの記述があった。

以上のことから、学生は、普段の大学生活のゼミ・ボランティア・資格試験・サークル・アルバイト・定期試験などの場面で、目標を設定し、それを着実に達成することを通じて、「実行力」を身に付けようとしていることが分かる。

「主体性」を「どのような場面・活動で身に付けたいか」という質問については、大学の授業・ボランティア・サークル活動・アルバイトなど、日常の多様な場面で、自分から行動することを増やしていきたいという回答が多かった。

具体的には、「学校での授業やボランティアなどで、自分から行動することを増やしたい」、「ゼミ、講義等に主体性を持って積極的に取り組む」、「普段の生活から何事にも主体的に取り組むことで身に付けたい」、「サークルなどでの活動を通して、もっと主体的にアイデアを出したり動いたりする」、「今後の大学生活の中の企画などの計画に積極的に参加する」、「ボランティアや、サークル活動、アルバイトなどでは自分から進んで行動する場面がたくさんあると思うので、そのようなときに、進んで取り組む力を身に付けたい」、「ゼミやサークルでリーダーとして『まずは自分から』をモットーに人に問いかけ、行動しています」などである。

学生は、普段の生活の多様な場面で主体性を発揮する場面が数多くあることを理解している。そして、それぞれの場面でアイデアを出したり、企画を立てたり、リーダーとして行動したりすることを通じて、「主体性」を身に付けようとしている。

「発信力」を身に付ける場面として、最も多かったのがゼミの活動であった。「ゼミなどでの発表の機会などに能力を高めていきたいと思います」など、ゼミでのディスカッションや、プレゼンテーションを通じて、「発信力」を身に付けたいとする回答が多い。

さらには、「部活動やサークルの場面で、自分の意見を求められたとき、すぐに自分の考えを整理し伝えられるようにしたい」、「特定の人だけではなく、より多くの人とコミュニケーションをとる」、「会議の場や交渉する時に相手に分かりやすく自分の言いたいことを伝える力を実際の企業のインターンシップや企業体験で身に付けたい」など、サークルやインターンシップにおいても「発信力」を向上させようとしていることが分かる。

アンケート対象となった学生が履修した二つのキャリア系科目では、「社会人基礎力」の授業を取り入れ、その内容・意義について学生に伝えているが、学生は、そうした座学の授業でも、「社会人基礎力」を学生生活で身に付けるイメージを抱いている。

こうした座学の授業から、さらにインターンシップの体験を通じて、「社会人基礎力」を向上させる具体的なビジョンを描くことができる。その一つの方法が、先述したように、インターンシップ先の社会人の姿をつぶさに観察することであろう。インターンシップ先の社会人の言動・姿勢を大学生活のなかで「社会人基礎力」を向上させるためのモデルとする。そのモデルに基づき、学生生活で自己の「社会人基礎力」を向上させるプランを具体化させ、インターンシップの学びをその後の学生生活に活かす筋道を明確に描くことができる。

以上のことから、より効果的な教育プログラムとして、次のようなインターンシップのプログラムを提示できる。

まず、インターンシップの事前授業等において、「社会人基礎力」の内容・意義について伝える。そして実際の現場研修では、社会人の仕事に対する姿勢、言動を観察し、その内容から、「社会人基礎力」の具体的内実を理解させる。

事後教育では、「社会人基礎力」の具体的なイメージをもとに、その後の学生生活において自身の「社会人基礎力」を向上させるプランを策定させ、「社会人基礎力」向上のビ

ジョンを持たせる。このように、「社会人基礎力」を「結節点」として、インターンシップの事前教育、現場研修、そして事後教育を結びつけ、事前教育・現場研修・事後教育の一連の流れのもとに、学生の「社会人基礎力」向上という観点からインターンシップを発展させることができる。

#### 4. 総括

「社会人基礎力」のうち、「主体性」は、進んで学ぶ意欲の原動力であり、「傾聴力」は、大学で学ぶ際の基本的姿勢である。そして「実行力」についても、学生は、学習目標を設定し、それを確実に実行する上でも重要な能力として位置づけている。さらに「発信力」は、ゼミ等でディスカッションをしたり、プレゼンテーションをしたりする際に重要な能力であり、分かりやすく意見を述べ、議論に参加し、発表することは、学ぶ姿勢の根幹にあるといつてよい。

その意味で「社会人基礎力」は、目標を設定して、意欲的に学ぶ姿勢を学生に身に付けさせる上でも重要な概念であり、「どのような場面において社会人基礎力を身に付けるのか」を学生に考えさせることは、大学生生活全般にまで及ぶ活動意欲の向上につながる。

インターンシップは、いわば学生から見れば、「非日常」の世界である。その「非日常」の体験を学生の「日常」の学生生活にいかに関与させるのか、また「非日常」の体験を起点として、その後の学生生活をいかに充実したものにするのか、という課題は、重要な課題の一つである。

「社会人基礎力」を活用して、インターンシップの学びを学生の「日常」の学びへと接合するためには、まずその事前教育において、「社会人基礎力」の意義を伝えることが必要となる。

さらに必要となるのは、社会人の働く姿の記憶である。その記憶は、研修中に学生が社会人の働き方を観察することによって形成される。

インターンシップは、実際に業務を体験し、その体験から学ぶ教育プログラムである。そのプログラムの発展に向けて、体験する業務内容自体をいかに充実させるか、という点は重要であろう。

ただそれに加えて、「社会人の働き方・姿勢を社会人基礎力の観点から観察することによって、社会人基礎力を具体的に理解する」という点もインターンシップの発展に向けて注目すべき点である。社会の多様な場面で、社会人の働く姿を観察し、学生は、自分が身に付けるべき「社会人基礎力」の具体的内実を理解することができる。

その「社会人基礎力」の具体的内実、研修の事後教育において、学生の日常生活へ接合される。事後教育では、研修によって理解された「社会人基礎力」の具体的内実のもとに、研修後の日常の学生生活のなかで「いかに社会人基礎力を向上させるべきか」について、より具体的な目標とプランを策定させる。そうすることによって、「社会人基礎力」は、「日常」において培われる能力としてモデル化される。

学生は、日常の学生生活のなかで、同じ目標を共有するグループに様々な場面で参加し、活動している。例えば、サークル・ボランティア・アルバイト・ゼミなどである。そうしたグループの一員として、グループの目標を達成するために、他のメンバーとコミュニケーションをとる行動は、学生の「日常」の世界で行われている。その「日常」の学生

生活の多様な活動において、「社会人基礎力」を向上させていくことができる。その際、効力を発揮するのは、社会人が「社会人基礎力」を具体的に発揮した場面の記憶である。「社会人基礎力」は、インターンシップの学びをその後の実りある学生生活、さらには、卒業後の社会人生活と結びつける結節点としての役割を果たすものであり、インターンシップをただその時限りの体験に終わらせることなく活用するために、重要な役割を担っている。

また、インターンシップの意義を「社会人基礎力」の観点から再考することは、キャリア教育そのものの意義について再考する起点ともなりうる。これまでの議論から浮き彫りになるのは、キャリア教育を、単なる職業教育・就職活動のための教育として位置づけるのではなく、自分の目標や将来の自分の理想像を設定し、それに向けて自分を高めるために必要なことを学ぶ教育として位置づけ、講義・ゼミ・課外活動を含めて多様な活動への自律的な参加を促し、その学びを明確化させる教育として位置づけることの大切さである。

これまでの考察から、インターンシップは、教養教育が目指すものと共通の土壌を有するといえよう。つまり、自分の不完全性を知り、理想的な自分像に向けて、自己を陶冶していくという方向性である。自分が完全な存在ではないこと、足りない能力は何かということ、そしてよりよき自己形成に向けて必要なことは何かを知る指標として、「社会人基礎力」を位置づけることができる。そして、その「社会人基礎力」を結節点とすることによって、インターンシップの事前教育・現場研修・事後教育を一連の連続した教育プログラムとして、実効性を持たせることができる。そうすることによって、インターンシップは、学生自身が他者との協働を通じて、自己の不完全性を認識し、より高い自己に向かうための教育としての意義を持つであろう。そうした教育的意義は、インターンシップ教育をさらに深化・発展させる上で重要である。

## 【注】

- 1) 高良和武監修、石田宏之・太田和男・古閑博美・田中宣秀編著（2007）『インターンシップとキャリア—産学連携教育の実証的研究—』学文社、16頁-17頁。
- 2) 文部科学省（2013年6月28日発表）「大学等における平成23年度のインターンシップ実施状況について」による。なお調査対象期間は2011年4月1日～2012年3月31日、調査実施時期は2014年1月～2月である。
- 3) 折戸晴雄（2015）「インターンシップの『これまで』と『これから』」、日本インターンシップ学会関東支部監修、折戸晴雄・服部治・横山皓一（2015）『インターンシップ入門 就活力・仕事を身につける』玉川大学出版部、12頁-13頁。
- 4) 社会人基礎力については、経済産業省のHP（<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>）を参照。
- 5) 真鍋和博（2010）「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『日本インターンシップ学会年報』第13号、9頁-17頁。
- 6) PBLとは、Project-Based Learningの略語であり、課題解決型の学習である。なおインターンシップにおいても、企業側が与えた課題に学生が取り組む課題解決型のインターンシップも実施されている。
- 7) エンployアビリティとは、一般的に「雇用される能力」として定義されている。寿山泰二（2012）『エンployアビリティにみる大学生のキャリア発達論—新時代の大学キャリア教育のあり方』金子書房、1頁。

- 8) 太田和男（2010）「PBL型インターンシップがエンプロイアビリティに与える影響—文系大学のケース」『帝京平成大学紀要』第21巻第2号、117頁-129頁。
- 9) 森 雅人・堀内 明（2011）「インターンシップによって培われる社会人基礎力のデータ解析(1)高大接続教育のデータベース化に向けた予備的考察」『札幌国際大学紀要』第42号、185頁-193頁。
- 10) 山野明美・平井松午・成行義文（2014）「キャリア教育におけるインターンシップ：大人数講義における事前学習の有効性と課題」『大学教育研究ジャーナル』第11号、38頁-55頁。
- 11) 経済産業省（編著）（2008）『今日から始める 社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す！～』角川学芸出版、経済産業省（著）（2010）『社会人基礎力 育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために—』学校法人河合塾、福岡女学院大学 浮田ゼミ（編著）（2013）『日本一の女子大生が教える社会人基礎力』梓書院。

## 【参考文献】

- 太田和男（2010）「PBL型インターンシップがエンプロイアビリティに与える影響—文系大学のケース」『帝京平成大学紀要』第21巻第2号、117頁-129頁
- 高良和武監修、石田宏之・太田和男・古閑博美・田中宣秀編著（2007）『インターンシップとキャリア—産学連携教育の実証的研究—』学文社
- 経済産業省（編著）（2008）『今日から始める 社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す！～』角川学芸出版
- 経済産業省（著）（2010）『社会人基礎力 育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために—』学校法人河合塾
- 寿山泰二（2012）『エンプロイアビリティにみる大学生のキャリア発達論—新時代の大学キャリア教育のあり方』金子書房
- 特定非営利活動法人 関東地域インターンシップ推進協会（2007）『平成18年度 地域産業活性化人材育成事業（インターンシップにおける社会人基礎力の実践的活用に関する調査）報告書』
- 日本インターンシップ学会関東支部監修、折戸晴雄・服部治・横山皓一（2015）『インターンシップ入門 就活力・仕事力を身につける』玉川大学出版部
- 平尾元彦（2014）「山口大学におけるキャリア学習の取り組み」『大学教育』第11号、36頁-42頁
- 福岡女学院大学 浮田ゼミ（編著）（2013）『日本一の女子大生が教える社会人基礎力』梓書院
- 藤本夕衣（著）（2012）『古典を失った大学—近代性の危機と教養の行方』NTT出版
- 松尾哲也（2012）「インターンシップと社会人基礎力—インターンシップ研修生の自己評価に基づく一考察—」『愛知淑徳大学 アクティブラーニング』第5号、15頁-24頁
- 松尾哲也（2013）「社会人基礎力研究—インターンシップ類型における社会人基礎力分析—」『愛知淑徳大学 アクティブラーニング』第6号、77頁-101頁
- 真鍋和博（2010）「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『日本インターンシップ学会年報』第13号、9頁-17頁
- 森 雅人・堀内 明（2011）「インターンシップによって培われる社会人基礎力のデータ解析(1)高大接続教育のデータベース化に向けた予備的考察」『札幌国際大学紀要』第42号、185-193頁
- 山野明美・平井松午・成行義文（2014）「キャリア教育におけるインターンシップ：大人数講義における事前学習の有効性と課題」『大学教育研究ジャーナル』第11号、38-55頁

**【謝辞】**

本研究は、日本インターンシップ学会の「2013年度高良記念研究助成」に採択され、その助成を受けた研究成果の一つです。この場を借りて、研究助成の審査を担当された先生方、日本インターンシップ学会事務局の皆様、そしてアンケートにご協力いただいた愛知淑徳大学および島根県立大学の学生の皆様に心より御礼申し上げます。

キーワード：インターンシップ 社会人基礎力 結節点  
インターンシップ後の学生生活

(MATSUO Tetsuya)